広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第41号　2013．3〉

中学校特別支援学級におけるカリキュラムの開発

― 職業生活を視野に入れた指導内容の検討 ―

檜和田祐介　小田原　舞　藤井　朋子　西　勉
落合　俊郎　若松　昭彦

１．はじめに

特別支援教育において中等教育段階では特に，職業教育，進路指導の充実を図ることが求められている。全教育活動を通じてキャリア教育の視点を踏まえた実践の充実が求められており，その一つの指導の形態として，各校では作業学習が取り組まれている。就労をより充実したものにするためには，主体的に働くことができる体制の構築が望まれる。従来の作業学習では「作業活動を学習の中心」に据え，働くことを学んでいくものであるが，実際には作業を伴わない内容も企業側からは求められており，それらを包括的に指導するための新しい指導の形態が必要であると考える。

２．研究の経緯

平成22年度より課題学習システムを取り入れた学習によりセルフマネージメント力や自己評価力の効用について研究をし，その効果が明らかとなった。

平成23年度は韓国の社会的企業をモデルにした作業学習の実践研究により，「経営」の感覚を持たせることで，働くことに対して自らを肯定的にとらえられることが明らかになっている。さらにICTを活用した授業づくりを視察研修し，新たな教材開発も可能な状況にある。働くスキルばかりでなく，その指導によって自己有用感や自己効力感などを持つことができ，主体的に働こうとする意欲を持たせることも重要である。そこで，今年度より新しい指導の形態として「職業生活」を立ち上げ，将来の就労とそれを含む社会生活を意識した新たな指導形態に取り組むこととした。

さらに，平成23年度からは，授業モデルの構築や授業仮説に基づく具体的な授業の指導案の検討を始めている。授業づくりについては，これまでも小学校・中学校・大学が共同で研究を推進してきている。

３．研究の目的・方法

（１）目的

本研究では就労に関する指導内容を総合的に扱い，就労への内的な意欲を高め，持続できるようなカリキュラムを開発することを目的とする。具体的には次の２点について提案を目指す。今年度は，社会的企業モデルの授業を実施し，課題点を模索する。

①韓国の社会的企業をモデルとし，作業活動を中心に据えるのではなく，働くとはどういうことなのかを考えていくことを中心にした指導のあり方。

②働くための基礎となる技能や意識を高めることができるワークシステムの活用方法。

（２）方法

ア，理論研究を大学と連携して行う。

イ，新たな指導の形態として「職業生活」を実施し，生徒の学習に対する様子や教職員間での協議によって，具体的な内容や評価のあり方について検討する。

ウ，個別の課題学習を応用し，就労に必要となる力の涵養が可能であるかを検討する。

エ，大学と連携して指導案検討及び授業研究を行い，指導のあり方を検討する。

４．「職業生活」の指導内容について

従来の知的障害特別支援教育においては，働くことに関する指導を作業学習で行ってきている。これは知的障害教育を特色付ける「合わせた指導の形態」の一つであり，特別支援学校学習指導要領解説では，「作業活動を学習活動の中心にしながら，児童生徒の働く意欲を培い，将来の職業生活や社会自立に必要な事柄を総合的に学習するものである」とされる。しかしながら，これまでの研究から，将来の就労を考えるとき，指導の視点として①「あいさつ，身だしなみ，などの

Yusuke HIWADA, Mai ODAHARA, Tomoko FUJII, Tsutomu NISHI, Toshiro OCHIAI, Akihiko WAKAMATSU
Curriculum development in special supportive class at junior high school― Toward the examination of the educational contents from the viewpoint offuture carrier life ―

一般的に社会生活でも必要とされるマナー等」②「自己有用感・自己効力感等の内発的な意欲の高まりや相手を意識できる人間関係の形成力」③「具体的に働くために直接必要となる技能」の３点からの指導が必要である。特別支援学校高等部等へほとんどの生徒が進学する昨今の現状を勘案すると，③については就労先それぞれに応じたスキルがあることから，前期中等教育の段階でそれに重点を置いて指導し習得させるよりもむしろ後期中等教育の段階で指導することが効率的かつ効果が高いと考える。

すなわち，従来の作業学習の言うところの「作業活動を学習活動の中心」に据えることは，現状に合致しているとは言い難く，むしろ前期中等教育においては，②の働くことに関わる自己有用感や自己効力感等，内的な意欲付を促すことを中心に据えた指導が生徒一人一人の社会的・職業的自立のためには必要である。

そこで，本研究を進めるにあたって新たに，「職業生活」の時間を設けることとした。時間設定を実際の就労の場面を想定し，マナーの時間（1時間），作業活動の時間（4時間）とし，学習に取り組む時間を大幅に拡大した。また，学習指導要領を参考にし，目標，内容，指導上の留意点を次のように設定した。

①目　　標

働くことに意欲を持ち，主体的に働く経験を通して，職業生活に必要な基礎的な知識・技能と態度の習得図り，実践的な態度を図る。

②内　　容

1）他者とのかかわりを通じ，働くことに関心と意欲を持ち，働く喜びを味わう
2）いろいろな職業や職業生活・進路に関心を持つ。
3）用具や機械，材料の特性や扱いが分かり，安全で衛生的に作業を行う。
4）金銭・時計・暦など社会生活の中で活用する。
5）働く場面を意識し，職業に就くために必要な基礎的なコミュニケーションスキルや知識・技能が分かる。
6）職業人として必要なマナー・ルールが分かる。
7）他者との協力の中で役割に応じた作業や実習を行う。
8）職業生活に必要な初歩的な情報機器の扱いに慣れる。
9）家庭生活や職業生活において余暇の過ごし方が分かる。

③留 意 点

1）生徒にとって教育的価値の高い作業活動を含んでいること
2）リサイクルの観点を取り入れ，環境に配慮し，原料・材料を入手することが容易で持続性のある業種を選定すること。
3）生徒の発達段階に応じた分業や共同作業が可能であること。
4）学習した事柄が般化できるような環境が整えられていること。
5）常に相手を意識し，学習したことへの成就感や達成感を体験できるような指導の工夫がなされていること。
6）生産から消費への一連の流れが理解されやすく，「経営」にかかわる学習活動を含んでいること。
7）余暇の指導を盛り込み，働くことへの意欲を持続できる工夫がなされていること。
8）学習や作業，実習の場所が安全で衛生的，健康的であり，適切な配慮がなされていること。

④指導上の共通確認事項

実際の指導に当たっては，授業を担当する職員が次のことを共通確認した。作業に関わる態度，社会人として必要となるルール・マナー，生徒の自発的な活動を生み出せるような支援のあり方などについて共通理解して授業に臨んだ。また，評価表（授業の記録）を付けることにより授業の中で見られた生徒の言動を共有できるよう工夫した。

○作業内容は指導者が提示し，それをアレンジするアイデアを，生徒を交え，協議のうえ決める。
○略案をグループごとに作成する。
○作業は分業，立ち仕事を基本とする。
○製品として完成度を高める。
○服装，マナー，態度などの職業人としての基本事項を指導する。
○安全・衛生には十分に配慮する。
○自己肯定感が高まるような言葉掛けなどを必要に応じて行う。
○評価表を作成し，授業ごとに評価し，生徒の情報交換を継続して行っていく。

⑤授業づくりの実際

実際の授業づくりでは，職業生活の創設意図に沿って，指導案の検討，指導・支援の工夫を行った。また，毎時間の授業後に行う振り返りを通して授業の見直しを積み重ね，以下に示すような授業モデルを作成した。

●「職業生活」の指導例

年　組　中学校特別支援学級（知的障害）全学年21名（１年生６名，２年生７名，３年生８名）

単元名　「私たちの東雲コーポレーション」
―見学会・説明会開催―

指導計画（全10時間）

（１）企画・戦略会議・・・・・・・・・・・・３時間
（２）見学会開催準備・・・・・・・・・・・・５時間
（３）見学会・説明会開催・・・・・・・・・・１時間
（４）振り返り・・・・・・・・・・・・・・・１時間

指導目標

集団活動の中で自分の果たすべき役割を理解し，行動を選択することができる。

指導後の生徒の様子

○自らの役割を認識し，何をしたのか，どのようにしたのかを言語化できるようになってきた。
○東雲コーポレーションの掟を意識した行動が日常生活の中でも見られている。
○集団の中で協力して活動することに喜びを感じ，他者の援助や協力しようとする姿が見られるようになった。
○他者（第三者）から自分たちの活動が認められ，自らを必要である，やったらできるという気持ちを持てるようになってきた。

５．個別の課題学習を応用した指導方法

本校の生徒は，入学時，主体的な行動よりも，いわゆる指示待ちといわれる行動や，指摘されることに対する過度な反応，難しいと思うことや初めて行うことに対する諦めや無気力さ，１つのことに集中して取り組むことの苦手さなど，自信のなさがうかがえる状況があった。そこで，「一人で取り組むことができ完成させた」「自分で計画を立ててそれを実行できた」といった成功体験を積むことによって自己肯定感を持たせることが必要であると考えた。さらに，自己肯定感が高まることによって，将来，自分の力を発揮し，それぞれの生活の場で責任を持って役割をこなそうとする姿となり，社会的・職業的自立につながるのではないかと考えた。

本校では個別の課題学習として自立活動の時間にワークシステムを活用している。そこで，このシステムを活用し，「課題＝お仕事」という職業的な意味付けを行い，働くことの基礎となる技能や意識を高める実践を行うこととした。

●個別の課題学習を応用した指導例：「自立活動」

年　組　中学校第1学年３組　６名（男子４名，女子２名）

題材名　「目標に向かってチャレンジ＆エンジョイ」

指導計画

（１）ワークシステムを用いた学習（個別課題学習）……８時間
（２）ポイント制を付加したWS学習　……10時間
（３）ポイント制を付加したWS学習＋製品作りⅠ……10時間
（４）製品発表会Ⅰ　……１時間
（５）ポイント制を付加したWS学習＋製品作りⅡ……10時間
（６）製品発表会Ⅱ　……１時間

指導目標

１）やるべきことを把握し集中して取り組み，最後までやり遂げる力をつける。
２）製品作りを通して，自分の良さを感じられるようにするとともに，他の生徒の良さに気付き認める気持ちを育てる。

指導後の生徒の様子

○自分に与えられた課題を間違わずに選んで行うことができ，わからないことがあれば挙手をして質問すること，私語をせず集中して行うこと，課題を遂行したら報告してチェックを受けること，ポイントがたまること，といった課題遂行上の決まりが理解されてきた。
○全員のポイントカードが一杯になったら，お楽しみ会ができることになっており，それを励みに一人ひとりが意欲的に課題に取り組めている。
○課題を遂行するスピードが速くなり，量もこなせるようになった。
○自分が頑張った成果，他の生徒からの肯定的評価を実感し，もっとやりたいという意欲を見せている。

６．実践を振り返って

この研究によって実施した職業生活の指導カリキュラムは図１のとおりである。また，働くことと関連づけ，ワークシステムを応用した指導をすることで，就労に必要と考えられる力として，４つの力の可能性が浮き彫りとなった。（図２）。

学習活動中にみられた生徒の様子や教員間の協議から，これら一連の実践による成果と課題について次に述べる。

①活動の時間にゆとりができ，教員間の連携も定期的に行うことができた。これによって目標や成果・改

善点等，生徒の活動に直接反映できる内容を共有しやすくなったのではないか。

②作業にかける時間を多くとることができ，役割分担，分業等，実際の働く場面に沿った指導ができ，責任感をもって授業に取り組むことが可能となっている。

③他者とのかかわりを生み出すことにより，自己効力感や自己有用感につながってきているのではないか。

④ワークシステムを職業的自立に向けて特化した指導では，生徒にとっては課題を「仕事」として捉えやすく，学習活動に意欲を持ち，主体的な参加ができるのではないか。

⑤他者からの評価を意図的に受ける場を設定でき，自己肯定感を高めたり，自己の適切な把握につながったりしているのではないか。

⑥「働き方」という視点で指導をしていくことで，自らの態度やマナーを見つめ，改善しようとする姿が見られた。また，将来の社会生活にも生かされる事が期待される。

図１　職業生活の指導カリキュラム

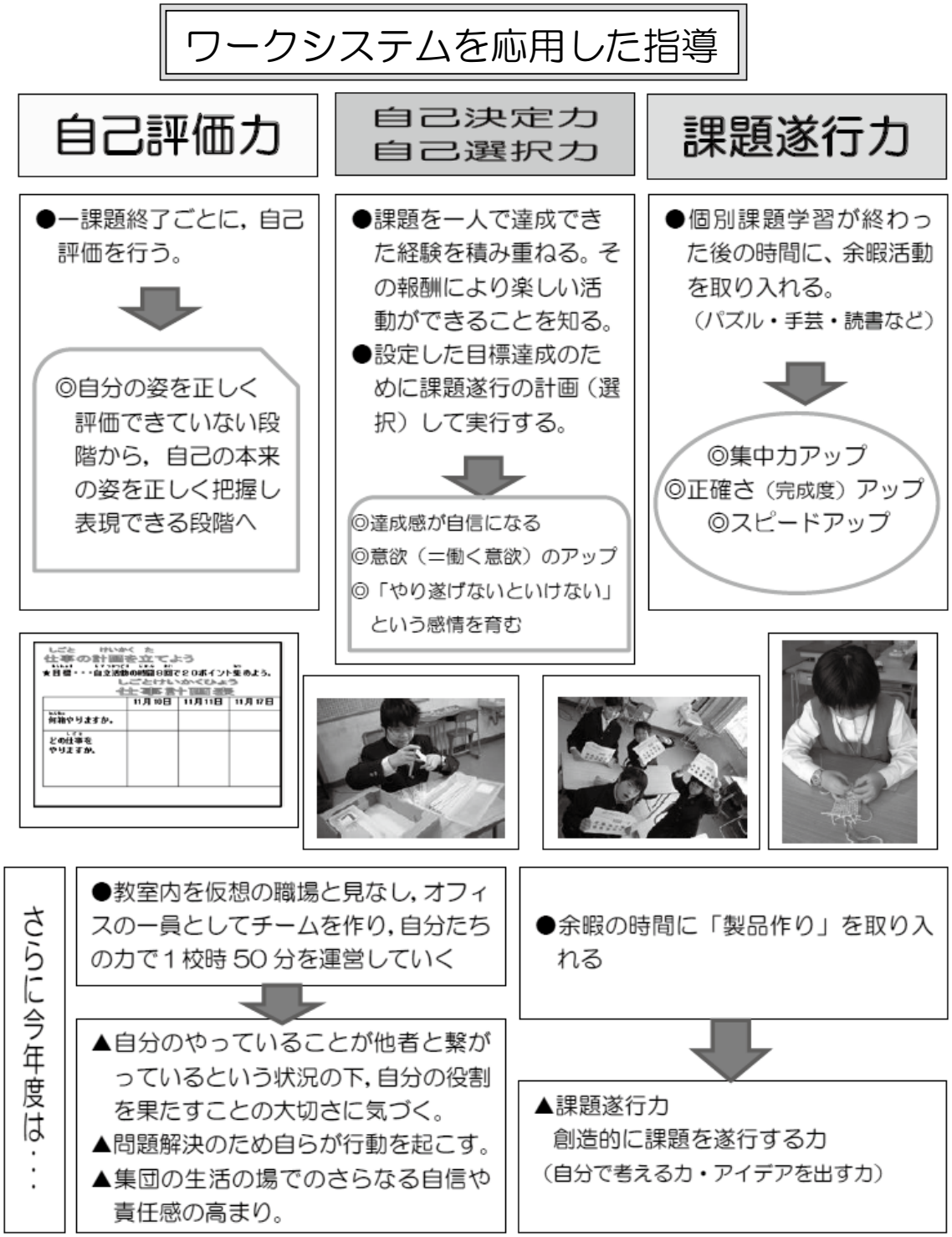

図２　ワークシステムの応用によってついてきた力

⑦働くということを考えるうえで，うまくできているときも，困難に出会ったときも，仲間と協力できる関係が大切であることを理解し，適切な遂行力を高めているのではないか。

⑧今後は，今回の実践によって見られた生徒の様子や教職員間の協議した課題点を再度検討するとともに，新しい取り組みを加えながら，職業的自立を目指した授業モデルを提案していく必要がある。

７．おわりに

昨今，特別支援教育においてもキャリア教育のさまざまな取り組みが各校でなされ，成果をあげつつある。しかしながら，就労率の高止まりや，離職の問題等，様々な問題も起きている。

長い不況の影響で，障害のある人々だけでなく若い人々の就職が難しい状況が続いている状況の下，法定雇用率の上昇や定義の変更など，厚生労働省機関でも障害者雇用に鋭意努力している。中央教育審議会によ

ると，キャリア教育では社会的・職業的自立に向けて発達段階に応じた体系的な取り組みが必要であり，人間関係形成・社会形成能力，自己理解・自己管理能力等の基礎的・汎用的能力等の育成が重要である（平成23年１月）とされる。

本研究では，これまでの成果をふまえ，知的障害のある生徒の就労を目指すという視点から，基礎的能力や社会生活に生かせる汎用的能力の育成を図るべく，新たな指導の方法を検討し，新たな指導の形態とそれによってつく力について模索し，検討したことを提案した。知的障害教育におけるキャリア教育の在り方に対して１つのモデルとなることを期待する。

参考文献

１）独立行政法人国立特別支援教育総合研究所編著（2011）「特別支援教育充実のためのキャリア教育ガイドブック」ジアース教育新社

２）藤井朋子・若松昭彦（2011）「将来を見通した余暇活動の指導に関する実践研究― 中学校特別支援学級における個別活動と集団活動を取り入れた授業実践 ―」，『広島大学附属東雲中学校研究紀要中学教育』第43集，pp.123－131

３）檜和田祐介・落合俊郎（2011），「中学校特別支援学級における就労を目指したキャリア教育の実践研究Ⅲ―就労をめざした作業学習の実践―」，『広島大学附属東雲中学校研究紀要中学教育』第43集，pp.113－121

４）檜和田祐介・落合俊郎（2010）「中学校特別支援学級における就労を目指したキャリア教育の実践研究Ⅱ―就労への意欲を高める指導の工夫―」『広島大学附属東雲中学校研究紀要中学教育』第42集，pp.106－110

５）檜和田祐介・落合俊郎（2009）「中学校特別支援学級における就労を目指したキャリア教育の実践研究―個と集団のかかわりによる生徒の変容を追って―」『広島大学附属東雲中学校研究紀要中学教育』第41集，pp.107－112

６）本田由紀（2010）「教育の職業的意義―若者，学校，社会をつなぐ」ちくま新書

７）マーガレット･E･キングシアーズ，ステファニー･L･カーペンター（2005）「ステップ式で考えるセルフマネージメントの指導」

８）文部科学省初等中等局特別支援教育課（2012）「特別支援教育資料」

９）森脇勤（2011）「学校のカタチ」ジアース教育新社

10）小田原舞・若松昭彦（2010）「中学校特別支援学級における社会的自立を目指した実践研究―自己評価の場面を取り入れた授業づくり―」『広島大学附属東雲中学校研究紀要中学教育』第42集，pp.97－103

11）小田原舞・若松昭彦（2011）「中学校特別支援学級における社会的自立を目指した実践研究Ⅱ―自己評価の場面を取り入れた授業づくり―」『広島大学附属東雲中学校研究紀要中学教育』第43集，pp.105－112

12）小倉昌男（2003）「福祉を変える経営」日経BP

13）大山泰弘（2009）「働く幸せ～仕事でいちばん大切なこと～」WAVE出版

14）梅永雄二（2010）「発達障害の人の就労支援ハンドブック」金剛出版